Phédre et Hippolyte

村　島　実恵子

ラシーヌによって不朽の名作となる前に，Phèdre と Hippolyte のテーマは幾世紀にも亙って数多くの劇作家によって書かれて来た。ギリシアの文豪ジンダロスのギリシア神話の作品の中にも描かれている。古代アテネで，融年に行われていたゼウスの神を祀る礼祭の場面にも書かれている。美の女神ミューズは先ずジュピターに魔法をかけ、次いでラチスとペレは魅力的なクレティス・イポリットの罠に落され国王に殺害される。この伝説はオリエントの国々の伝説としても残されている。これがやがてイポリットの理想の姿として描かれる迄に少しづつ形を変えて行くのである。この伝説は先ず紀元前 432 年ユーリピデスの悲劇〝イポリット〟に最初のテーマとして書かれた。このテーマがラシーヌに悲劇を書かせる端緒になった。そこでは，ソフォクレスの影響は殆んど見られないのである。

又，そのテーマはラテン悲劇の中ではオヴイッドの Metamorphose と Fastes に，ヌエネイドの作品に僅かに残されている。

プレタルクに於てはテゼー（国王）の物語がとり入れられている。ラシーヌはセネカのフェードルに影響を受けて作品を書き始めたと言われる。フランス文学の中でも多くの作家がこの主題について書いている。1573 年 Garnier 作の "Hippoly", 1675 年 Bidard によって書かれている，又 1646 年 Gilbert, によっても書かれている。 Pradhon の "La Phedre et Hippolyte" はラシーヌの作品と同じ頃に発表された。しかし作家達の基本的なテーマは殆んど同じようである。Thesee の妻 Phedre は義理の息子 Hippolyte に思いを寄せ，懊悩の末自ら死を選ぶ。怒った国王 Thesee は海の怪獣を送って無実の息子を殺させるのである。

ユーリピデスでは Phedre は Hippolyte の前で死ぬがセネカでは違う。

この様に古代に於ては Hippolyte の神話を土台にしてこの物語りが生れたのである。ギリシア神話では Hippolyte の情熱的な死については説明がされていない，その為 Phedre は原文の脱落を充たす為に登場し，罪ある情熱のテーマとして彼女が描かれている。

フランス悲劇に於ては Phedre はもはや二次的な役割りをしているのではなく，Phedre はクレタの王女 Ariane に一つのイメージを与える為に描かれている。Thesee のフィアンセであるアリアンヌが反目してテゼーの注意を惹く新しい対象となっている。この主題はラシーヌの最初の詩章に展開されている。1672 年のコルネイユの Ariane に於ても登場してくる。

ここで少し，主要な劇作家に取り上げられたイポリットとフェードルのテーマについて考察してみたい。

ユーリピデスの〝王女 Hippolyte〟

この戯曲では伝統的なテーマを残し乍らも少し修正を加えている。ユーリピデスは〝Phedre の生き方をかなり変えさせてみた〟と書いている。当時の慣習通り愛の女神アフロディテのプロローグで始まっている。この作品ではすでにイポリットに呪いをかけ，フェードルは清純なアルテミスに嫉妬を持っている。陰謀によってフェードルの評判を落させようと企み，彼女の義理の息子に思いを寄せているとして女神アフロディテは二人を死に導いて行くのである。プロローグの中で美の女神アフロディテはイポリットに復讐すると告げ，清純なアルテミス姫を愛していたイポリットがフェードルと恋に陥っているとアルテミスに思い込ませる。この悪意に失望したフェードルは乳母をイポリットの許に送るのである。フェードルは夫国王テゼーの不在を利用した。乳母は自分の女主人の罪ある愛を叶えさせたいと申し出るが，フェードルはそれを拒絶する。秘密を洩らさないと云う約束にも拘らず，乳母は忠義心にかられてイポリットに義母フェードルの情熱をあかして了うのであった。イポリットは怒って国外に出て行き，フェードルは彼女の乳母を非難し，恥づかしさの余り自は死を選ぶのである。彼女を発見したテゼーは彼女の首に一通の手紙がつけられているのを見た。それにはイポリットに想いを寄せられた為死を選ぶと書いてあった。

イポリットに激怒したテゼーはポセイドンを送って彼を殺害する事を命

じる。この後一人の使者によってイポリットの事故が知らされた。その時アルテミスはテゼーに真実を知らせるのである。テゼーの傍に運ばれて来たイポリットは許された父のもとで息を引きとった。この物語では愛の女神アフロディテと清純の女神アルメミスが対称的に描かれている。即ちアルテミスの仲裁はテゼーの目を覚まさせる為に必要であった。アフロディテの描き方はユーリピデスの方法に一致している。この作品に表れている超自然の象徴的な価値はユーリピデスの最初の作品では描かれていない。そこではヒーロの半神の役割りは愛の陰謀の為に消されている。

セネカを始めとしてその後の劇作家達の作品に於ては悲劇の超自然的雰囲気は減少している。〝一般的な解釈としては女王フェードルがイポリットに自分の思いを打ち明けたのは，夫国王の数多い不誠実さを自分の弁解の口実としていることである。これは他の登場人物とのコントラストに於ても不明瞭な復讐の罠として使われている事である。〟(注 1)　森の静寂の暗示はフランスの劇作家に描かれたフェードルが劇中で自分の願望を説明している。ラシーヌに於ては先人達の文体に固執していない事であろう。ユーリピデスの作品はフランスの劇作家に美と象徴的なものを与えているが，ラシーヌは〝劇により理知的なものを加味させたい〟と書いている。

セネカのフェードル

セネカの悲劇はユーリピデスのイポリット以上に私達に霊感を与えてくれる。セネカに於てフェードルはソフォクレスのフェードルと同様に取り扱われている。アテネの近郊でイポリットと友人達が狩を楽しんでいる。彼等はイポリットがディアニスに対して抱いている感情について語り合っている。フェードルは彼女の夫国王テゼーの長い間の不在と不誠実に疲れ果てイポリットを誘惑しようとするが彼女の乳母はその実行を思い止まらせようとする。乳母はイポリットがデイアニスに思いを寄せている事を知っていたからである。フエードルはイポリットに愛を告白している間彼が剣を構えて拒否の姿勢を表していることに気付くのであった。

イポリットが逃亡している間に，フェードルの乳母は彼が義母に暴力を振るおうとしたと云う事を帰国した国王テゼーに告げた。怒った国王はネプテュスを使って息子を殺させようとする。一人の使者がイポリットの死

を告げに来る。フエードルはそこで自分の過った情熱を夫テゼーに告白し，夫国王のそばで自ら命を断つ，父王は歎き悲しんで息子イポリットの遺体を引きとるのであった。

ユーリピデスの作品と同様に抒情的な朗読とコーラスの勿体ぶった台詞によって交叉されている。他の劇作家の作品とユーリピデスのイポリットと区別される事は乳母が女王の秘密を知っていたと云う事であろう。

R・Elliot も云っている様にラテン悲劇に於ては Denone の告白に同じ価値を与えていない事である。又，フェードルが自分の愛をイポリットに告白すると云う方法はフランス作者のペンによって再現された。女神ヴィーナスの憎しみの対象はフェードルであり，イポリットではない。W・Newton は〝この主題の変化に対して新しい理解をしていかなければならないセネカにとって，伝説は何ら宗教的な意味はない。セケカの悲劇は先ずフェードルの抑制出来ない情熱の心理の研究である〟この様に修正を加えた後でも劇の重要な性格は変えられていないのである。イポリットについてはユーリピデスの人物に似せた処もうかがわれる。ラテン文学者達はフェードルに最初の場を与えているとも云えよう。

彼女はもはや内気な女王ではなく，テゼーの前でイポリットを批難し，そこに勇気と分析を示し観客の共感を得ているのである。

Ch. Dedeyan が述べているように「主人公ディアンヌは神秘的崇拝者としてではなく，ディアンヌの清純な魅力は他の人の気持を落ちつかせ，もはや狩人の保護者丈にとどまっているのではない。

又、セネカに於てはヴィーナスの登場はユーリピデスの登場場面よりは少く，単にキューピッドとして登場するのである。16世紀の後，ラシーヌはこれに手を加えて書き直し深層心理の分析に心を砕いたのである。しかもフエードルの情熱に神秘的力の影響を弱めようとも決してしてはいない。ユーリピデス・セネカとは反対に人間の情熱の詳細な観察者であり，超自然の意味づけ丈を重要視しているのではなく，ラテン悲劇とは反対に形而上学的世界に対する疑い，私達に神への思いがない限り，超自然の神秘の現存を感じさせてはくれないのである。セネカが我々に示してくれたものは感動的でいつも力強いのである。狩人の服装をしたアンティオプの前でフェードルは叫ぶのである。〝これがイポリットの激しい母である〟又使者の話の中に出て来る怪獣の動きに作者は自由な動きを与えているので

ある。この部分は，ラシーヌに於ては (act v. sc-6) ユーリピデスやオヴイッドやセネカより，もっと感動的でさえある。ラシーヌのフェードルはイポリットに対する自分の告白の場面はセネカと同様である。

E. Drefus-Brissac は〝ラシーヌは感情と思考の内面をより美しい筆致で表現している。殊に素晴しい場面となっているのはフェードルが自分の罪ある愛の告白を乳母にする処である〟最終のテゼーとイポリットの間については，ユーリピデスと同じ取り扱いがされている。

Garnier の Hippolyte

フェードルとイポリットに関するフランスに於ける最初の戯曲はセネカを思い出させ，伝説の細部に互って思い起させてくれる。この影響にも拘らず，イポリットはフェードルに心を奪われた役として登場する。フェードルは国王テゼーの妻であり続けることに，ラ・ピスリエールやラシーヌは注目している。他の作家達はフェードルを一人の婚約者としてしか取り扱っていない。

ガルニェはセネカの作品に多くを加えていない。即ちラテン文学をフランス語に書き換えたにすぎないような気がする。神は息子テゼーの戦果について語っている，それは迫り来る死を予言しているかのようである。テゼーは面白味のない型にはまった人物としてしか描かれていない。反対にイポリットに於ては〝ロマネスクなメランコリーが満ちている〟と R. Elliot は書いている。イポリットは愛のトラブルには関与していない，彼の義母フェードルはヴィーナスの残酷さについて抒情的な悲しみをみせている。詩人は私達を乳母の悔悟の念にひきずり込ませ，海に遂に身を投じると云う事を観客にみせるのである。最後に観客の注意を引く事を考えコーラスが準備されている。E. Dreyfus-Brissac はガルニエの進展に注目している。〝抒情的な言葉丈で劇の進行に都合の良いものにしていない事であり，作者は疑い深いフェードルをテーマにして進めている，これはユーリピデスではなされなかったものである。その事はラシーヌが注意を払ったコーラスの中の美しい詞によってもうかがい知ることが出来る。

Q'une femme que jalousie
Que haine ou qu'amour ont saisie
Est redoutable et que son coeur

Couve de silleuse rancoeur !
Elle ne brasse que vengeance
La vengeance la rejoint toujours,
Et quoi qu'elle discours et pense
Ce ne sont que sanglants dis cours.

古代のテーマの理解に特別なことが加えられている訳ではないが，ガルニェの悲劇はその新鮮さと真実性は後継者に受けつがれている。

La Pineliere の Hippolyte

1635年に発表されたLa Pinelieresのイポリットは当時大成功を収めた。彼はフェードルを主要人物としている。セネカの作品を忠実に表現し，序言でも〝この作品には何も書き落しはしていない〟と書いている。ヴィーナスの犠牲となったと言われ乍ら因習的なフェードルは東の間の栄光であるテゼーに強く心を動かされた。私達に古代の伝説を額縁に複元しようとする作者の努力のあとを偲ばせてくれる。R. Elliot も言っている様に〝ラ・ピヌリエールの最大の特色は第五幕でヒロインを殺す地獄の場面であり，テゼーが韻詞の中で失われた詞を先に述べていることである「大ヘラクレスか自分でなければ恐怖に満ちたこの場所から抜け出す術を知らない」〟

私達は劇全体に流れる或るぞっとするような趣味がある事が分る。使者によってイポリットの死が語られている様に怪獣の描写がファンタスティックになっている。神への幻影，神話との比較は平凡である。

Comme l'heureux retour du dieu de la lumiere
Fait renaitre les fleurs dans la saison premiere
Monarque valeureux, ainsi votre retour

1635年のイポリットは余り評判にならなかった。それは詩人ユーリピデスにえいきょうを与えたことを示している。

Bidard の Hippolyte

ラシーヌの作品より2年前に発表された，Mathien Bidard の作品はジルベールの作品を修正したものである，この作品は1645年に発表されテゼー

の妻としてではなく婚約者として扱われている。イポリットに関しては面白味のない男性として表現され，ヒロインに恋する事になる。これは恋敵の陰謀によってフェードルを批難し，彼女を死に迄追い込むのである。B-idard は古代のテーマを現代化し乍らラテン的思考を取り入れ，フェードルは主要な人物となり新たにライバルを持つことになる。ジルベールに書かれたフェードルの嫉妬心はこのドラマの中で重要な役を果している。彼の悲劇等は Thomas Corneille の Ariane の三年後に表われた J. Pommier は〝ロマンの様な戯曲である，私達は劇のけいぞくに思いをはせるのである。二人の運命を知りたがっているのである。テゼーがフェードルにここから逃げ出してアテネにお戻りなさい。そして幸せな生活に戻りなさいと云わせている。〟R. Elliot は〝この劇の構造はラシーヌの作風に似ているけれど，陰謀についての詳細さはかなり異っている。第五幕ではイポリットの無実に気がつく事になるのである。神秘的な雰囲気が完全に消えている，これは La Pineliere 以後の作品の登場人物に表わされている。同情し難い恋愛に作者達は随所に宿命と云う語を使っていることである。〟2年間ラシーヌのフェードルは人々の前から姿を消すことになる。これはプラドンの作品発表後3日後に発表された作品である。

Pradhon のフェードルとイポリット

これは Bouillon 公爵夫人によって計画されたラシーヌへの敵対行為である。彼女は Pradhon の後盾者となっていた。彼は中流の作者で地方の詩人であり，ラシーヌの作品に対抗しようとして悲劇詩を書いたのである。当時プラドンの作品は数ヶ月間人々の眼にふれた丈でその后上演される事もなくなった。

プラドンはラシーヌに似せてアリシア王女を登場させているが，ラシーヌのアリシアの様に崇高な人物として描き出されてはいない。ラシーヌに於てはアリシア姫とイポリットはお互いに愛し合い，しかもフェードルにも忠実を示すのである。フェードルはジルベールやヒダールの作品の様に，テゼーの婚約者としてでなく彼女は魅力的で奸策に富み，愛と政治を一緒にし，テゼーの王位を狙いイポリットには真実の告白をしないのである。

彼女は只自分の心の動きをみせる丈で満足している。イポリットはアリ

シア姫との結婚にちゅうちょを示し，フェードルにも愛を感じないと佗びて国外に逃れようとする。テゼーはイポリットの情熱を神託によって知らされる。しかしフェードルとアリシアがいるのを見て安心する。フェードルはテゼーにアリシア姫を青年と結婚させることを提言した。しかしその前に彼女はイポリットの心を測ろうとし，嫉妬心から彼女は自ら死ぬことによって彼を脅かそうとする，テゼーには理由が良く分らないでいたが，イポリットは事故で死に至り，フェードルはイポリットの傍で自らの命を断つのである。劇はテゼーとアリシアが慰め合う処で幕が下りることになる。

ラシーヌの Phedre と Hippolyte

ラシーヌのフェードルは 1677 年 1 月 1 日ブルゴーニュ座で上演された。ラシーヌ 38 才の年で前作「イフェジェニイ」上演後 2 年数ヶ月経過している。ラシーヌのフェードル上演に関連して競作事件が起っている。ラシーヌのライバルとみなされていたプラドンの「フェードル」が他の劇場で上演されていた。当時ラシーヌを敵視していた貴族達の陰謀で劇場を借り切ってラシーヌのフェードルを失敗させようとしたのである。それによってラシーヌの作品とは比較にならないようなプラドンの作品は一応成功しラシーヌの作品は危機に陥るが，プラドンのフェードルはその後 5 ヶ月を以て終りを告げ，ラシーヌの作品はフランスの劇場で現在迄上演され続けている。

ラシーヌのフェードルの主題は女王フェードルが夫国王テゼーの先妻の息子イポリットに恋すると云う内容でフランスではラシーヌ以前に作品が 4 作発表されている。ラシーヌが影響を受けたのはフランスの先作者を起えて遠くギリシアのユーリピデス，ローマのセネカ等の影響を受け乍らも尚独創性が表現されている。第一はフェードルの夫テゼ王戦死の虚報が入って来ること，第二にイポリットがアリシア姫を恋していることである。フェードルが義理の息子イポリットに思いを告白するのは夫国が戦死したと云う知らせを受けたあとのことであり，彼女の告白は正当化されないまでも彼女の苦悩が強く観客の同情を引く事になる。ラシーヌはセネが試みた以上にフェードルを前面に押し出しており，背徳の女性を描くのでなく，

義理の息子への愛情を感じ乍らこれを抑制し，苦悩の末に自らを亡す宿命の女性を描き尚も夫国夫に全てを告白する悔いの姿の女性を描いていることである。

参 考 文 献

P. Crouzet : Tout Racine, ici, a Port-Royal.
F. Mauriac : Racine.
R. Picard : da carriere de Jean Racine.
N. Newton : Le theme de Phedre et d'Heppolyte.
Ch. Dedeyan : Racine et sa Phedre.
J. L. Barrault : Phedre, mise en scene.
注（I）R. Elliot : Mythes et legendes dans le theatre de Racine.